



^ 13  
2898  
1









岳曾吉平兩盛  
SHANUSUJI  
TAKEMURA

東の  
徳らわの  
みぢの  
とひ屋をた  
さくちの  
七料  
権三木  
竹煙陸



太平後妻隆婦七州  
TAIPEI  
KONIN  
TAKEMURA

賊將鯨江濡九郎  
SEKI  
KUMAGATA  
KUMAGATA



み  
つら  
の夫あや  
かとお  
しゆ  
一月

兩賊去てお放の積  
あ。期約と行葉  
隨徒諸を討つと  
屢功の後藩七僧

女賊三蓮  
ONIN  
ONIN

近世新話雲晴間雙玉傳前集目次

壹之卷

- 第一回 藤波信貞諫岳曾古
- 第二回 結因孽多津雌先現
- 第三回 告密譚藤波遇災厄
- 第四回 辨古說長則焚紫龍谷

二之卷

- 第五回 誘才子靈魂告志意
- 第六回 談奇度文字入遇禍

三之卷

- 第七回 遺狂歌宇雜生因縁
- 第八回 歎殘臭靈魂說處女
- 第九回 誘別墅別所倍勅使
- 第十回 情々相挑双玉全現

四之卷

目次畢

通計十回

太平二悟錢今殺小鮎  
 現夢中紫雲雄告喪  
 太平二怒罵司駭二郎  
 忠邦采双箭殺大鮎  
 嬰轎子餘江遇異姬  
 碎瑞石行竜得名刀  
 乱閨門七草恣春情  
 感三名王詔命下播陽  
 棋緒声玉花結赤情  
 扁舟浮江乘人究危

附言

宮田南北附して曰く此書の専ら播筋の一揆出没不測無双の魁王蛟倉行龍岳曾古異男女二名の傳記と述其談唐山の演義小説ふ做つて悉く憑空結構の筆み成ども亦大み擾あり就中文中あつて鋪所有ふ似れどこの小説家の常ありて。姫御達小童兒迄も是れ此筋譯あれは又斯く因縁より起りて度と手と以て引がて。作者の佳意と演人が為るあつてりて巻數も最重り二集三集と回と續局と結ふ至らんと進へ四方の看官退屈あらんも快うね随分意中と縮て演多し序ふ又附して。此書表号ふ近世新話雲晴間双玉傳と標を近世新話へ近代の人氣と執り當時の志と演ふか人へ雲の晴間の播筋の古名く又玉傳

又三十一  
國名風土記ふらら。神功兵と発して三韓を伐干時霖雨打續き中國へ  
と止む播磨の洋に至り。時天氣快晴して始て四方と眸を。つとつと此地と  
雨雲の晴間と号と舊史紀ふ針間の國と云又播磨の風土記ふ昔の秋と  
ハリと云神功皇后の時一夜の間ふりの木生じて盛長せり。后は播磨の國  
改む職原大令亦いへら。量行天皇二年は播磨の國稱目大郎姫と立て皇后とす  
即日本武尊と生播磨の國名へあふ出と云其外順和名鈿詞林採葉等見  
由山陽八ヶ國の始つて國は播磨の木まき也(播磨の國と号と云薩摩志摩等の磨と  
播磨の磨と書と播磨の土微く石まき國あり磨の字と書とも俗に云り双  
玉傳の魁主ふ附。二顆の名玉此世ふ出。靈應奇端と顯せり。夏の傳紀出演  
しゆへあり

近世 雲晴間雙玉傳第一集卷之一  
新話

東潘 宮田南北編次

第一回 藤波信節岳曾古と諷  
太平二恪錢小蛇と殺しむ

天文年中ふ當つ。東播州加東郡天神山と云る高山ふ  
一群の強盜住り。賊主の男女二箇あして男は較倉行竜といひ。  
女は巽と喚名せり。二名ともふ天姓の美人あして其勇猛向ふ  
處敢て敵を。數千人の小倭羅と集め猛威と東播小震ふ事。  
漢の代ふとつ。張角のて。宋の世あつ。水滸の一百八人の  
ど。然まども水滸傳なる百八人の忠義の俊傑。這双玉傳の

又三十一

〇一

魁主二名の。淫蛇の再來。井它小倭儼の者までも。仁義からら  
 一個もあ。播州一国と討從人と。太平の虚小乗。忽地ふ  
 悪ユと起。後ふも後。勢小乗。討潰。人と殺  
 舎と焼。豪家都。一百四十有餘軒。郡小ひ。加東郡  
 三木郡。加西郡。揖東郡。加古郡。凡五郡と騷。三木城と破  
 らんと。依之長則。度々責討。其外奇話珍說實跡と演虚説と  
 天神山の山寨と。度々責討。其外奇話珍說實跡と演虚説と  
 著。最面白く妖賊一代の顛末と。大團圓小至。榭れ  
 齒と以て引。似。緯委。尋。足利將軍。室町の武將

蒲上大  
 學ハ浦  
 上二換  
 孫ガ

源の義晴卿の治世。天文元年壬辰の年と。今茲將軍討  
 部少輔植佃。許。歸京。即室町。東播。加東郡瀧野の郷。最  
 君。細川右京太夫晴元管領。小住。屋鋪の構。莊美  
 富さう。郷士あり。代々龍野村。小住。屋鋪の構。莊美  
 して。當郡二十一ヶ村の長と兼。田園七町。余反と領。今茲  
 主の名と。嵩曾古太平二助盛と稱。今茲齡四十余りと五ッ  
 六越。その意。奸や。人々も思。諸夏の  
 行跡。我意の。已より下と。非道多。只金銀と貯  
 事。たの。非道多。只金銀と貯  
 づ。三木候。出勤して。重役と重人。中。浦  
 大學連形と云。別所殿の権臣あり。這人奸悪邪智。して。



表少の忠臣ぶれども。飽まで不臣の意と抱き。豫て謀及せん  
と思ふ志深し。是ふより。嵩曾古太平二助盛と。よきと  
結び。且後年謀反の時。嵩曾古とめて。軍中雜費の用。い  
立んと。飽まで此と延し。爰とめて。浦上嵩曾古と見る  
時。雉と蛇の和して。野に遊ぶがごとし。食ある内。相損せず。  
一旦。食盡ば。互に相食んとする心あり。かゝる者の嵩曾古。あ  
れ。貧民と少くも恵ま。赤松家より。預地二十一ヶ村と。恰も已  
が領地の。ごく思ひあり。平生。不野しく。果役と。うけ。貯へ  
金銀。高利あり。て。村々。不借つ。もの。利銀。でも。延引。ま。る。と。あ。ら。ん  
法と。立。く。時刻と。定め。一時。遅。き。時。の。一。月。の。利。と。益。し。二。時。遅。き

時。二。月。の。利。足。と。益。し。三。時。四。時。と。隨。く。高。利。と。益。し。ゆ  
兩。三。日。も。延。引。ま。る。時。の。其。一。族。と。牽。獄。下。し。諸。道。具。と。以。て  
借。費。と。償。ふ。其。行。ひ。險。々。悒。々。し。て。さ。ら。ぬ。一。点。の。仁。心。な。し。  
恁。者。の。効。ひ。う。く。少。く。も。上。ふ。立。人。不。遇。ふ。時。の。大。頭。と。ま。げ。し。  
恰。も。平。と。蜘蛛。の。て。り。あり。へ。い。く。と。云。て。忍。を。憤。み。し。が。如。く。  
又。少。く。も。下。は。不。出。合。ふ。て。飽。ま。で。高。ぶ。る。夏。蟪。蛄  
の。ど。く。鼻。の。先。で。人。と。あ。ら。い。貪。欲。浮。薄。の。性。な。り。く。る  
み。ぞ。其。妻。の。又。夫。不。似。げ。ぬ。其。心。の。正。く。今。茲。三。十。八。日  
春。と。迎。へ。し。其。名。と。藤。浪。と。稱。へ。り。夫。太。平。二。が。欲。心。と。嘖  
夏。不。觸。で。諫。て。し。よ。う。そ。れ。人。の。方。物。の。長。や。し。て。仁。心。を

中兒ハ鄙語云人面獸心行末とてを宜しめるまじ願ふ  
 今より却心と僕ノ道不寄給ひ子孫ノ長久家繁昌の  
 策とてありまわしと機を見て諷る自信烈婦の志とて  
 わして柔あらず行跡よく理ふかあて正ふ是婦人中の  
 傑人とぞ見へしとる。岳曾古太平二助盛の妻の諷諫  
 問よりもあざうり笑ふや。この鳥許がまじき  
 女のもし出古人も云むや法の堅くして民安んむ。譬は  
 一家と治るふ家制柔かねば奴僕主と蔑りて憲法一も  
 行まざる。漢末の法緩うして忽天下乱る。こゝとめ  
 法に堅くし。推と正して百姓いふと却て良民ふ為んと欲す

汝知らむや古より法緩やして。この国家と乱やとの  
 いと多し。況て今室町殿將軍義晴公と云漸武將の威おとらへ  
 国家の乱を遠めるまの。のほ物念の江湖上ふ慈ふ仁義立  
 して。国家の衰微と待人更彼宋の襄王が仁もあま  
 越べきたすけ。此ゆふ司馬師も云り。人毒あまの大夫夫  
 不あむ。関とや和国唐山小霸王が鴻業を興せし人ふ  
 廉直なるん。いよ早あり魏の武帝ハ漢の相丞曹参後  
 裔みく。數代恩ある献帝と七。其即位と奪へり。我  
 我皇朝ふありてり。富室町殿の先祖ある。足利尊氏公直  
 義公の二將軍ハ世も類まかりぬ。奸詐第一の人なり

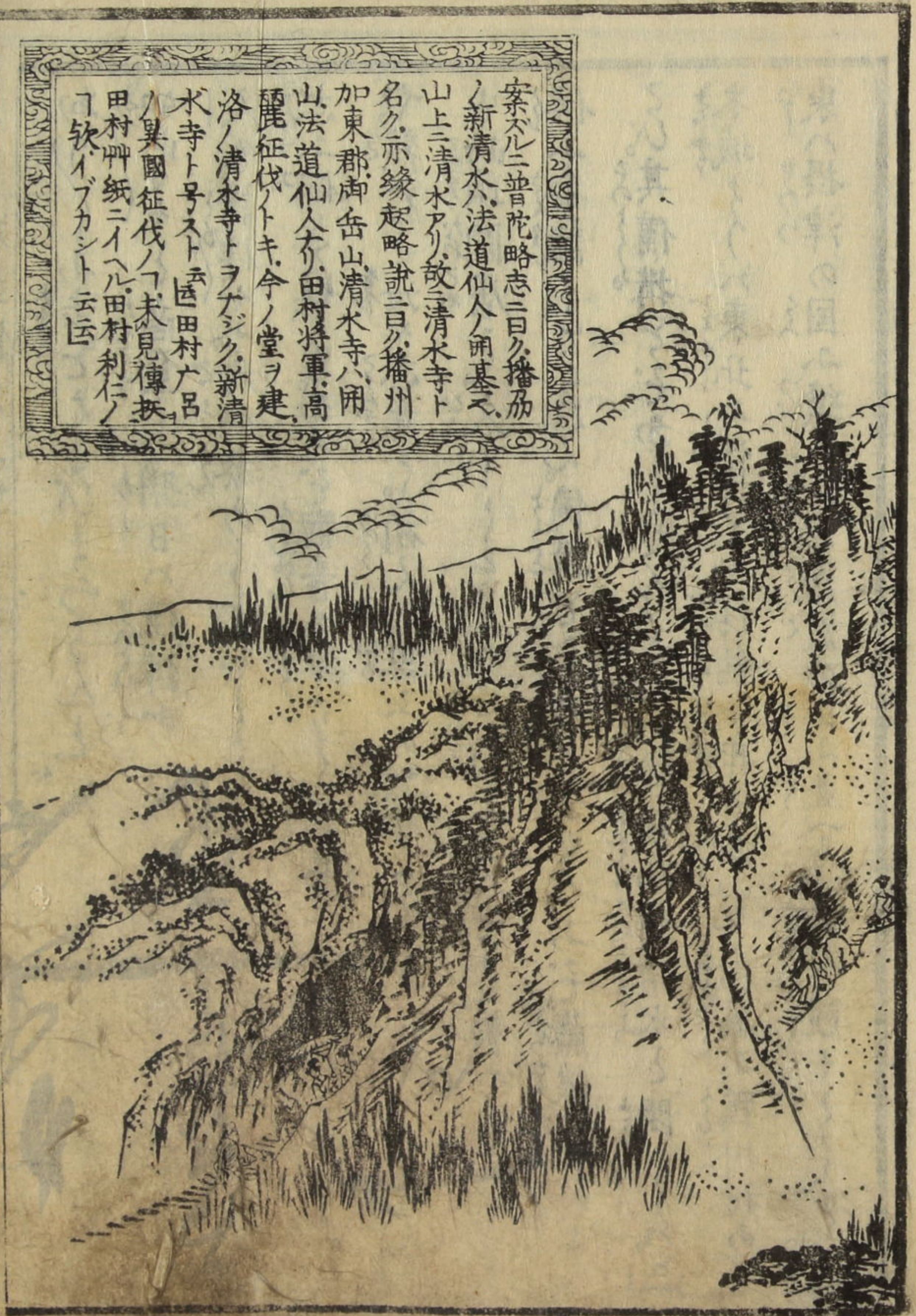
か。この穂便の噂あがり。尊氏公の奸詐ある。初北條高時の縁者。時官軍の軍威小恐。後醍醐帝不隨て北条と打七。其後舍弟直義君と謀り。准后小賄賂して。功もある。後三佐の高位小叙し。又卿諱の尊の一字と。下されまつり。恩と忘。直義君と心と合せ。護良親王と鎌倉あつ。情あくも喪ひ。つる。刺征夷大將軍の印綬と朝廷へ返す。つる。とさへ。持明院殿と。卿位小即奉り。終小南帝と吉野小遂ひ。天下と一統し。今室町の將軍まで。凡十余二君の卿代と相續あり。給へり。天と正と照し。給ひ。足利家連綿して。いづく今日まで續くべきや。安利と以て見し時。廉直律義ハ甚損へ。晏平仲も慶忌と嘆じて。天淫人と罵ると云り。

汝も首是們ふ心と寄く。無益の仁義立する。縋あつ。罵る。云放し。此も閔入ざり。藤波今ハ詮術あり。倒小困。果獨り胸とぞ苦し。只心中小嘆息し。其後ハ諫んともせず。心小憤思ふや。吾濟今茲四旬小近く。今小生育なる。緯ハ是ぞ全く。吾濟大人の奸詐邪醜と天道ハ憎ませ給ふゆゑある。然らずハ吾濟身生前の悪き因果の報應ある。歎悲し。いづく今日まで。苦し。胸の火と。鎮り。再び思ふや。噫我あつ。愚痴ありき。閔傳へつ。緯とあり。當国清水寺の觀世音を。靈現を。炳然。就中子ある者。此靈場小歩と運び。觀音菩薩の悲願を祈らば。生育ありと云。又閔り。吾濟今日より。此靈場小願とけ。



ちのて一恵もぬる山の名の  
傍徳驗然清水寺  
清水とよめと汲くあはる

案スルニ普陀略志ニ曰ク播磨  
ノ新清水ハ法道仙人ノ開基ニ  
山上ニ清水アリ故ニ清水寺ト  
名ク亦縁起略説ニ曰ク播州  
加東郡神岳山清水寺ハ開  
山法道仙人ナリ田村將軍高  
麗征伐ノトキ今ノ堂ヲ建  
洛ノ清水寺トヲナシク新清  
水寺ト号スト云 匠田村六呂  
ノ異國征伐ノノ末見傳扶  
田村冊紙ニイヘル田村利仁ノ  
ヲ欽イブカシト云云



あつゝ歩とささびまつゝんと思ひみづれば夫太平二不緯  
 如此々々と商量し。明日ハ僥倖卯月八日。僥生日ふひべ。願ふ大  
 人も諸伴々々。神佛衆ありまわし。云と太平三打関。そ好  
 志ふ似しれども。あんど観音の力あり。容易ふ生育ある夏と得ん  
 や。然れど汝が志意。祈んと思ふのと。今ささふ又何と拒ん余  
 も此頃閑居。久しき歩行とさへせむと。鬱散の爲なまは。  
 伴ふ衆詰してらねん。備構とねと云るも。藤浪頻打ら  
 こび。其備構とさあたる。柳播新清水と関へ。三  
 木城よりハ東北に當つ。僥刹一座の高山。南麓ハ鴨川村あり。  
 東ハ摂津の国ハ續き。北ハ丹波の山ハ並べり。山勢競々。嶺

聳。巖岫青して碧水清く落碎くささふ千筋の布致と疑り。  
 天と撞く生繁り。柵檜の間ハ。卷栢石連翹。珍き草木  
 生く。ささふ土と見え。所あり。山上ハ至る。七堂伽藍魏々  
 して。土木の精巧と盡し。其堂塔の廣大なる。霞と拂て雲ハ  
 聳へ。或ハ龍虎の彫あり。又ハ鳳凰の刊りあり。屋根震天井柱  
 勾欄。咸遺もあ。最上の佳木以て宮くれば。構輝四下ハ散徹  
 観者魂と外ハす。怪。現ハ法道仙人の開基。一  
 て。代々の聖主の御祈願あり。理り。此山元來山上ハ。清き泉  
 あり。清水寺と喚做。山号ハ五岳山本尊ハ即十  
 一面觀世音。聖徳太子の草創り。堀河院寛治五年。善光上人

再興せり。こゝ播磨雜筆の説りて。普陀畧志といふ異あり。金  
堂の南ふあり。聖武帝御建立。藥師堂の良ふあり。池の二位大塔の東南ふ  
あり。祇園女阿彌陀堂の北ふあり。頼朝卿の建立あり。則金輪聖王天長地  
久。国土安全天の下。太平の御祈願所ふてぞありり。堂舎都々  
廿三所坊數凡六十余坊。御朱印ハ六十石。西国う々ハ二十五番京  
師妙法院の末寺ふとして。晝夜の勤行不怠格式堅固の靈場あり。  
殊ハ四月八日ハ。佛誕の日ありとして。諸方の登山引もきりず。三  
心四趣の老若男女袖と列ね裳と並り。所陝すて參詣も。此日品  
曾古太平二夫婦ハ。四五六七八と云。二個の奴隸。中食の標子あと  
荷持せ。残の春乃日も最長く。空天ふ雲寛あり。微風かろうふ吹り

の長閑ある景色云びやりもあらず。ととでふと。清水寺ふ着くれ  
べ。先本堂ふ參院も。藤波心ふ念して願ふ早く一子と子給へ。  
五ヶ年が其内ハ。毎月一度宛。參詣せん。頻ふ念じまりり。  
太平二ハ夫よりも。藤波并ふ二個の奴隸と。召連り何方此方  
とりち巡り。景よき場所と撰つ。標子と開る中食とやらぬ  
羊躑躅の志どけあらぬ。咲乱りと愛慰る。長き日も々々々々ふ。  
早末の刻も過くれば。敷散り物遺もあらぬ。取る々々々々。  
打連づち。清水寺も跡ふ見あして。瀧野と々々々々。帰る清  
水より瀧野迄の間ふ天神山と稱る。最儉々々々々。一座の山は。  
白雲常ふ山の腰と廻る。高嶺却々霞ふ埋れ。巖峩々々々々。四方

小道あり。這里二年経くる。樵夫獵夫。罕も山入者あり。この  
 又小狼猪狐兔の類常小獵狩の愁と知らず。己がまふく。柵棲か  
 して。最おそろべき山あり。時小太平二們四人の者へ此  
 山下ふ來か。一。這里等より。りの男の童十余人打集ひ小  
 あり。一足の蛇と取竹の先より。賜あぐして。うふうくと。さひあぐれ  
 へ藤浪うくと見るより。驚き周章く声とろけ。やよ子供平  
 よ暫く待ね。今日ハ四月八日。釈加牟尼佛の誕生日。唐山大和  
 お。あへ。生東西の命と助る。最太切の日ありぞよ。汝達今其蛇の  
 命と助。放ち遣らば。其賞。一箇前。五十文宛。鳥目と与ふべ  
 し。此義やつふと問く。童共ハ大に喜び。始御せ。今吾々小

鳥目と給う。一足の蛇は。いうやりの隻とて。望と叶へ。ひ  
 らせん。いふ藤波喜びつ。蛇の命と助得。何と外に望べき。  
 汝達皆々是首へ。いざ鳥目と与んと。四五六。付豫て准  
 備の財布より。繙解々といそぐ。鳥目と取出し。とて与ん  
 とする所へ。太平二ハ初より。少く後。歩。此時。不追付  
 來つ。此有さぬと見より。先其由と問。藤波か。不便  
 と得。更。商語。太平二大。叱り付。鳥許ある哉  
 藤波が所存や。今此小童と。凡十五人も有つべし。一箇前  
 小五十。都。八百文の鳥目あり。約東通り。足さ  
 き。もも八百文の鳥目。尋。得。人。吾。富

又玉傳卷之一

夏と得る。千貫目の金銀めれども。若干年の労と積若干日乃  
 苦と重く漸く得る。此身躰臺吾今職の在官めれども。富は是  
 諸侯小敵を。一銭ありとてうろつ捨る。終に金銀の真加ふ盡く。  
 忽貧道小陥る。一帝一疋の小虫と救んとて。八百文の財を捨る。却  
 て傍の罰と蒙り。家の破滅と引出さる。況て蛇と殺せども。其  
 罪は彼小童小あつ。吾們あ干る。纏あ。只寄ら守障らす。罪の  
 あり又八百文の損もあ。是首等の道理とて。さまたまふ。つらぬ世  
 話する馬鹿仁義彼道小倒る。飢人と嘆く。婦人の仁ら。是とや  
 云ある。決して救ふ夏あつ。と。愕然とて。氣色と変小兒共と終  
 付々。藤波は今更引あも引あ守。又遣ふ。夫の手前り。

手持不沙汰。四五六。目くらま。鳥目と再財布へおき。あ  
 くり。是と見く。童共。口々。罵り。喚き。此人々。へ風俗。似ても似  
 付ぬ。格惜哉。年ふ不足も。無身あ。吾々と。翔ら。腹立あ。其蛇  
 と。打殺せし。云儘。或。石の。頭と。碎き。又。竹の。胸中と。撞。恰  
 も。古き。帯と。別。微塵。あ。捨。皆。あ。く。ふ。之  
 時。不。彼。蛇。の。躰。一。道。紫。氣。立。の。あり。何。處。も。あ。く。飛  
 き。只。陰。々。々。々。習。風。肌。を。犯。さ。ふ。似。須。更。あ。く。止。り。り  
 太平。二。等。は。是。と。見。く。不。審。云。び。や。も。あ。う。す。悠。ろ。不。長。居。す。人  
 々。跡。も。見。ぎ。道。と。り。ぎ。瀧。野。と。さ。く。く。り。路。や  
 行。手。へ。山。も。里。卿。も。あ。り。訓。道。と。一。足。も。迷。ふ。夏。あ。く。思。ひ。



早く家路ふりりくるが。日へまど西み入ずして申下刻みありきり  
扱もそれより藤波の晝夜觀世音の所名ととめへ只顧生音あり  
緯と祈念ざる時きあ。すむ四月も暮行く。降く降す五  
月雨の晴てい晴ぬ宵の雲曇りて独り思ひ寝ふ腦もあく打卧  
くろが心慰生憎み障子と少し開く。外の方と打詠め誓じ  
心の築山と慰とあく見やり。最あけあく咲乱れくる鼻  
木の花のあげより。一疋の小蛇さりと這出つ。口より赤き舌  
と出。藤波を見く頭とさげ。拜するやふ見へられ。藤波あ  
や驚つ眼と定くより見れば先日頃日清水より下向の折  
日。天神山の麓あく助んとせし小蛇ありきり。そも何とめて目

印とまう。此小蛇元來。背筋ふれ紫の鱗布嶋のぐくありて。よ乃  
つこの小蛇とあがり。か。藤波是より看得く。且又疑ひ思ふ  
や。天神山の麓あく。小兒の為ふ殺されくる小蛇が再這里へ來べき  
やあ。この吾濟が迷ひあり。せう都く小蛇ふかきりす。似くる物  
のまう。一途ふそれと思ふ。あか吾あ。鈍ま。やと思ひ  
直して婢女と喚んとす。ふ声出。自立。椽先の障子やあら  
めん。すりふ。又其手勲得。この口惜し身を操所へ忽然  
して彼小蛇電光のぐく飛上り藤波が口の内へ入く見へ。か  
ああやし。後へぐくと倒れくるが。駭然して目と見。  
惣身都く冷汗流れ。胸踊り身ふる。是ど南河の一夢ありきり。

藤波ハ心の内頻ニ奇異の思ひとあり。獨債思ふやうこの常ふりし  
し。天神山ゆく助け得ざりし。小蛇の緯とうふくくと思ふがゆへに  
とあり。かゝる正かき他緯と見し。心の頬かし。業づる胃の火  
とかさへ。渾夫あは。這緯さうふ譚らす。五月の空や思ひの曇り。鬱  
らうくして明し暮しうり

第二回

結因孽多津雌先出現と  
現夢中紫宅雄変と告ぐ

却説太平二が妻藤波へ。早晚月の障と覚む。頻連ニ酸東西と好  
で。面の色も何とあり。青盡かて且快勇あり。あつふうり。りや懐  
胎もあうさるや。醫老を迎て見せられ。醫老まづ其脉躰

と老。或ハ腹と拿杯して。霎時頭上と傾けら。稍あうく申す。是全  
く懐胎あり。産る兒ハ女子ありん。この脉躰うく見へども。乃自れ  
齡ハ三十八明年癸巳初婁四月己の月。小生る。子ハ女子。ける。夏彰然  
く。いと。いふ。岳曾古夫婦の者ハ喜ふ。夏大うとあり。吾々久し  
生育あきめ。神子願傍不祈うて。子と待緯。譬て云ハ大早魁不雲  
覓と待ようも。猶さう慕しうり。ふ今さう守り懐胎と聞  
夏年の願望と早速し。る心地ぞも願う。早く安産の良劑と  
賜り給と。いつふか。うり。太平二が笑満面不彰。きく。媚るがて。ん  
ヤセバ。藤波も喜ひく。是ぞ尊敬や觀世音の。御利益ふらうて。あな  
るべし。と口の内不觀世音。御名と。懸回。称へる。此時醫老ハ

僕者不齋ちりべ。藥笈ちりべより。出いて調あむ。七味八味の薬匙ちりべの加減かへん。や心の加減かへん。蓋かきふ。双ふたべし。三四さんしよ貼片ていぺん端はたより包かむ。藤波ふじなみが前まへふ出い。煎せんじやうの焦あり。吞の加減かへん。丸まる右みぎ々々々々。緯いと遺おちあ。演のをきつ。頃とき退ひて。い。か。り。き。り。も。と。て。み。て。其こ祀いも暮くれ望まれ。天文てんぶん二に癸みづ己こ年とし鴻雁こうえん寒さむと追おう。北濱きたはまふ。り。燕揚えんやう柳やなぎと暮くれふ。正ただ南原なんげんふ。旋まわる。残梅ざんばい盛櫻せいおうの陽氣やうきも去い。螻蛄ろうこ鳴な。蛭むし蛸たこ出いる。甚あれ。い。づ。れ。蚊あの出いる。秋あきふ。あり。ふ。き。り。千ち岩いわ此頃このとき藤波ふじなみの猛ま可か。不ふ産さんの氣き付つられ。上う下げ。好この騷さわも。一方ひとあ。り。て。先ま晚ばん産家さんかへ入いる。太平たいへい二に悦よろこび。勇ゆう。小こ廁せうと。其こ安否あんひと問とむ。緯いと恰たも。擗ひの齒はと引ひく。如ごとく。且かつ。あ。り。家いえ内うち。ぎ。り。め。安産あんさん々々々々。罵のり。喚なび。御子ごこの即女すなはの兒こ御ごふ。て。両位りやうゐ共とも不ふ御ご

安あ康こうと告つぐ。と。閑まく。太平たいへい二に天てん工こう喜きび。地ちふ喜きび。一ひと宵よハ頻あり。踊おどり。是こ即すなは四月しがつ八はち日にち朝あ後ご四よ時じ。く。ぞ。あ。り。く。四よ時じハ己この月つき。此こ八はち日にちハ己こふ當あたり。四よ時じハ又また己こ之時とき。年としハ尚なほ又また四月しがつ八はち日にちハ去い年とし。太平たいへい二に藤波ふじなみ門かどが清き水みづ寺てらへ。來き。詰つせ。傷や。因よ縁縁。道みち首くびハ必かな然ら。卷ま中ちゆうの准じゆん構かま。の。下した。者もの官くわん筆ひつ鋒ほうの拙せつ陋ろうを。あ。さ。け。共とも趣しゆ向むかハ丸まる撒さ細こ。余あり。ふ。長ながく。言こと分わり。作しやう意いの。天てん機きと。世よも。似に。お。り。ら。き。サ。く。あ。り。ら。ん。悦よろこび。譬たとへ。東あ西せいあ。り。と。又また其その名なと号なづふ。及およぶ。彼かれ那な首くび那なと。商しやう量りやうし。昨きのう年とし辰しんの祀いより胎たる。今いま茲こ己この年とし産うれ。と。名なと異ちがひ。号なづふ。年としの行ゆみ。隨したがふ。其その顔かほ美み璧へきと欺あま。人ひと間まの。見みざり。く。れ。バ。夫う婦ふが嬉うれし。云いび。や。あ。り。當あたり。是こ。千ち公こうの璞は磨まざれ。も。その光ひかりとあ。り。太たい真しんが揚あ家けふ育そち。由よし

施南越の月も觀じも。唐土の昔も思ひぬづりて愛慈しむ心は  
 中ぞつたの。只顧成人との指とぞ人暮し。あつるふ  
 這項最怪しむべき更起れり。そとつふと尋るふ。此瀧野村の近村  
 新街といふ所あり。此村の梢盡處も毛助といふ最貧しき水呑  
 あくぬ瘦土民今茲まで十四計りある一人の娘とりて貧しき土民の  
 子も似けあへ。容顔醜くざりければ。泥中の蓮ありと愛慈しむ  
 更一うゝあつて。まらしき中も育るるが一夜近隣の女の童と。そる  
 歩行とあせし時。忽何處にもあつて。一朵の黒雲變轉來り彼  
 娘と巻よと見え。一が空中に舞上り。良の方へ飛去るるも。残  
 の女童大に驚き。倒つ轉ひつ逃る。緯恠々と毛助夫婦もつげ

くれ。毛助夫婦へ大に駭き哭んとする。声出ても。呆れ呆れと足  
 くらたす。狂氣のてりあり。恠て果と村内の者共。品曾  
 古許追討へ出。手分となつ。八方と。涉獵と。つづも終その行  
 ぐ。知れむ。せやく。死尸ありとも尋得。と八方と心と盡せ  
 どのの甲斐さ。嘆より外みせん術の無の。此由三木み訪  
 へ奏し。毛助夫婦のさま。と。大人數り。慰め。着て。この更  
 かり。静。此一条是。あつ天文二癸巳秋菊月初十日  
 の更あり。異誕生の年。それより。のち毎年一箇つ。の童が失  
 る。連年止。皆好美娘十四五を限り。せり。あ  
 り。這近郷。何とあ。人心も。穩。あ。更。最。早。う。そ。何。者。の。所。

為とつゞ夏ある者かゞく無由人好美娘と持し者ハ心易き度  
 さうにあり。他郷子親家ある者ハ蜜情地ハ預けあとしら。チ  
 顧騷熱あすのみわくさうにせんもどあうらうを是ハ付し太  
 平二夫婦ハ異雌ハ威のくくろ子隨ハ容顔いよく薦蘭く。台  
 ひこめハ初花ふつぎよと月とかけくろく。飛燕漢宮の粧と  
 こくすふあしをいとくく美うく賢あつあを。尚や邪神ハ誘き  
 あくハ嘆を増鏡影も形もあきままでふなりやハさる夏あも  
 いうせんとうせんりののちをく心と碎く中ハ太平二心ハ思ふ  
 ち。予ハ娘ハ女中の王あり。清と得て下さぬうハゆへく  
 數箇国と領せし大守欽。今ハ威衰勢ハ挫けし足利家ても

婿ぶくくく参らさる。余ハ即国老くく。一國二國の領主とあ  
 り。栄利と子孫ハ遺をべし。是や吾家の福ハ神。此所くく  
 うつ。長成と待丹ハ邪神ハ獲らさあを。是室の山と海ハ弄て  
 くいぜと守て鬼と待と。鄙語の譬ハ似ハ後悔そくハ立くか  
 ちんと。心中ハ計較さくめ一時三木ハ出仕の砌。蒲上大學ハ見  
 へ消々地ハ示し合とやう。今室町の御所さうぬハ消々地ハ人と  
 諸国ハ出し美人と求め給と閑り。吾娘翼ハ親の口ハ。懲  
 ハ最鈍まき夏あり。當時兩ハ下廣くく。又ハ有ま  
 いら絶色あり。倘君公の敬上と推奉ハよろ。適吾娘室町さ  
 まの寵恩ハ憐ら。御身と栄利と共ハせんと。いよとら閑蒲上

へ心中笑巧不入あぐ。熊と詰てやう。足下う娘の縁起始て聞く  
 某も其艶色へ洞查せり併足下が娘として献不緯むつ。這  
 首小ツの尚量あり。まづ表通の某が娘ありと云う。十分  
 み衣裳と飾らせ首尾よく君の寵を蒙り。緯成てのち緩々と足  
 下の娘といふ支へ某よりや上バ室町殿も感悦あつ。褒賞あり  
 んへ疑あり。這徳やいふと談むれば太平二心不思ふやう。今蒲上  
 が云とわり。吾娘ありと實と明して室町殿へ献らば。去向小二股  
 三股多して却て緯火速あるまじ。如く大學が言ふ隨ひ。万支  
 那彼小骨ゆせ。緯成て後某娘といふ支奏報さへ吾念願成  
 就せん。飽迄心不思案し。即ち答てやう。家長公の仰せ

きりり。理あり。万支御指圖と願奉る。仰不随ひまらんと云は  
 大學悦び。尚両箇の首と交へ何那の較計數刻不及ん。太平二  
 休暇尤し。道と急ぐり来り。緯徳々と妻藤波不消々地り  
 語り聞せ。独り心不喜びり。藤波の吾渾夫の心の底と愛姫  
 の行末とさ入汲る。開夜へ思ひ煩々。快はつ寝らま。更  
 行儘不間眠し。忽然として一箇の美少年。那處ともあ。出来  
 れり。藤波愕き何者あるぞ。開顔面と債見ふ。年まさり二  
 ハむり。色白くして目秀て。容貌玉と欺く不似て。其形體清  
 兼つて。まぶゆも迄の角髪は是ぞ人間界の人と見へ。喜ふ  
 藤波が前ふと。妙ある声もやう。余は是此世不任人間不



双玉傳卷之一

敬告一 身乃ひであぞと流業の

現夢裡雌它示映

七りふんくまあへくせよんせ  
 柳むりくこは花乃うりの中

有像第貳

五ノ一

てはいり守。御身が慈悲心の深きと愛く。宿世の因縁告やき人抑  
 此瀧野村と。清水寺の間ある。山ふ昔より。幾年の星霜経  
 くる。雌雄一氣の大蛇あり雄と紫蛇と云雌と多津雌と云了  
 世々此山小栖棲し。山小賤涉獵師の患より夏無儘不或時ハハ  
 蛇とへん。又ハ美男美女と粧化里不出てハ祭とや。山小八て食  
 と未ハ天地と共ハ壽と久しうせんと思ひしが去。天文元年壬  
 辰の四月八日。其雌あり多津雌の大蛇小蛇小變じて里小下り。暫く  
 路上と遊行せし。ふさうさうさう小兒為小拿へらきてハ出沒不測雨  
 と呼風と起し。天地造化の手段あり大蛇も小く變ぜし時ハ身と  
 逃る。ふさへ為術あり。死と待より外あり。ふさうさうさう御身

の慈悲心あり。又生んとて。是。御身ハ夫品曾  
 古刀祢ハ貧乏無仁の人あり。少く終ハ慈悲の行いと破り。多津雌ハ  
 悲しや小兒の為ハ身と碎れ骨迄も粉のごとく為らる。ハ皆是  
 太平二が欲心あり。然れども其日ハ四月八日。儒誕の日ハ尊さふハ  
 忽畜生道の苦とのが。世ハ有く。人間と庄れ出。も秋加  
 牟尼僂の御利益あり。吾ハそれハ引く。雌と取られ  
 て只一箇畜生道の苦と出す。大蛇ハ其性淫ありて交る。ところ  
 あし。そのゆへハ雌雄一ハ離。時ハ開相慕ハ夏鶯の春鳥を  
 恋ハ似。吾さうさうさう其雌あり。多津雌と御身が夫あり。  
 太平二主ハ殺され。斑女ハ聞ハあり。且ハ晨の起卧ハ



思ひ出すや妻垣の堪し思ひ不堪しにて。新町村ある毛助が娘を  
 悄悄地ふ奪ひ入りつ。吾起卧の伽とせり。見らるる通り吾容  
 貌の醜くうらぬと那娘も憎くかきや思ひく人深く結と毎  
 晝毎夜ふ奉仕緯の正首ありし人人間へ陽あきども蛇蝎乃  
 陰小勝緯あつたお。未一歳も暮ぬ内。早く此世の命盡て。黄泉  
 の逆旅不赴り。夫よりも來る毎歳ふ。好美少婦一箇宛涼獲て  
 雌とさるる。皆首始のどくあり。吾陰小對しぐく。長寿すく  
 一箇もあ。今で元元の独り寝不成て敢果あ。歳月と送り  
 つ今是首へ形と顯し侍りあり。吾元來一の望あり。願ふん  
 身か愛媛ある。巽と吾濟不賜りいへ。首始吾濟が云し深き

因縁あるゆへあり。夫のくあり。巽元元津雌の再來あるゆへ。  
 陰氣きりり。浅く。又其名さ巽と喚へ自と因ある。妙詮自  
 識。大蛇へ至妙の造化あり。奪ひ去へ易しや。ゆへ。御身が慈悲  
 あつ心ふ愛で斯忌因縁と報侍る。あつのくあり。御身ふ又生口ま  
 く。欲する大夏あり。一早の緯あり。吾濟兼々這一郡と湖水小  
 せんとの有念あり。手下の蛇蝎八万四千余足三日の内。喚集  
 め。天地ふ水とん。吾自雨師とあり。東西十里南北十里の湖水と  
 造り。龍の宮都と成さんと欲す。倘吾念成就せ。死する者數千  
 人。其中ふ御身も共不満歎あり。人へ必定あり。こと生口ま。世  
 み有る。き恩ある人の命と絶バ實り。思ふゆへ語り

かきき一大夏とほけまのすありしに。當此緯へ忘る人も人ふ語り給  
ふへうす。倘し少くても這夏と人ふ語り給ひあは。御身の命ハ立つ  
變ふのころ。候ふ迄不慮の火に。恐懼をあらうと。少くもくくり玉  
あよ異ハ明夜紫の雲を包と見給り。是吾迎ふ來りし。御身の如何  
おも云く。早く這地と十里の外へ逃のび給へ。後小至らば。吾身影  
み履そきて守の神とあり侍らん。人むじくも此夏と人みかくり給  
ひそと。鶯台玉瑟と調る。語りや思へ。愕き覺て。正小南柯は  
一夢のまじも。又是現み見とる。て。往々恐々としてさう。その心  
落地入方どあり。あぢ。呆れ。居る。居る。畢竟藤波此夢の一大  
夏人ふ語り。語りぬ。その二の巻始め解ん

近世  
新話

雲晴間雙玉傳第一集卷之一 終

夢の  
世の

或人難じとく。つら。つら。南北子。此書ハ蛇蝎の造化とく。と  
いま。一巻と盡や盡さざる。夢の段二箇あり。  
の譚と。余り夢の段。余り。予答て。足下の仰其利  
あり。是ふ對して。今更ふ。是悲と答る所とあり。あつれども浮  
世の緯。夢あり。ざる。夏。昔魯國小鹿とく。草ふく。く  
て後忘れ。是夢あり。んと疑へり。後ふ。又其鹿と拾。者。又夢あり  
うと疑。今縣不訥。不縣。今是と閑と等。頭と頓思案  
て。是吾夢あり。んと疑へり。ま。人間万夏。皆塞翁が馬のど  
夢あり。守。何あり。や

